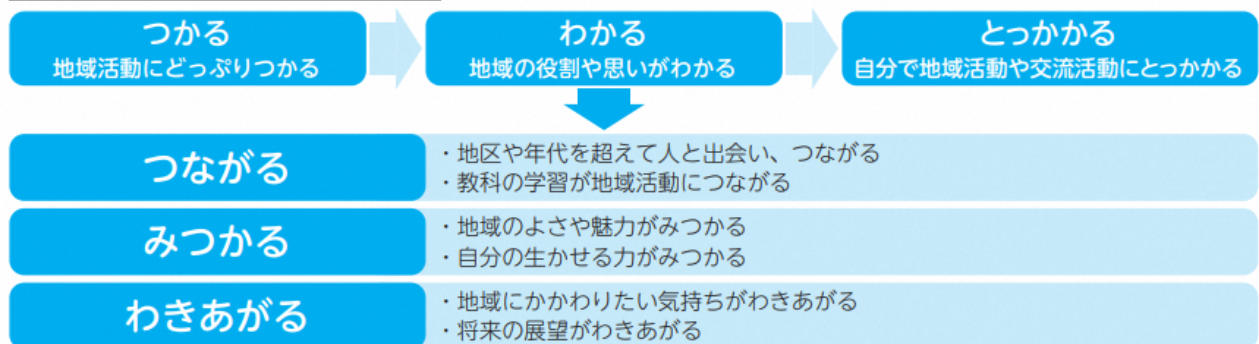


ふるさと教育 取組事例

学校名	益田市立益田東中学校		
学年	主な教科等	主に関わる単元名	活用した教育資源 (ひと・もの・こと)
1-3	総合的な 学習の時間	6 かるプロジェクト	中学校区におられる 魅力的な“ひと”たち
ねらい	公民館を中心とした地域活動の体験や交流を通して、活動意義や内容、地域の方の想いを理解し、その方々とつながることで、地域への愛着を深め、地域貢献の態度を養う。		

1 取組の概要

「6かるプロジェクト」構想図



益田東中学校では、『6かるプロジェクト』という総合的な学習の時間の授業を2年生を中心に全学年で設定し、学習のめあてを「つかる・わかる・とっかかる・つながる・みつける・わきあがる」としている。ローカル（地域）での学びを通して、めあてが達成できるように、東中学校区にある3つの公民館（益田・豊川・真砂）を中心となって、地域ぐるみで行われている学習活動である。2年生では、年間を通して3つの公民館があるそれぞれの地域に赴き、体験活動を通して、その地域ごとに魅力的な“ひと”に出会う活動に取り組んでいる。この取り組みのポイントを3つ挙げる。

1点目は、この学習活動の目的を学校と地域（公民館）が共有していることである。担当職員と公民館主事との対話の中で、学習活動のねらいや地域の願いをお互いが理解し、この授業を活用して、一緒に学びを創るパートナーとして活動している。

2点目は、学習活動の随所に対話活動があることである。自分が考えていることや体験したことを他者にアウトプットする経験は、より学びを深めるポイントになっている。具体的には、地域の大人と対話する「6かるトーク」を設定し、多様な他者と関わり、つながるきっかけにもなっている。

3点目は、学校の授業だけで完結させていないということである。中学校では、夏季休業中に「6かるクエスト」と称して、地域のボランティア活動に参加し、その難易度に応じて星を獲得するという遊び心のある仕掛けを行っている。公民館（地域）では、あえて授業内で完結しない活動を設計するなどの工夫をして、生徒の意欲や好奇心をくすぐる活動を面白がって創り出し、学校外での活動に生徒が主体的に参加できるように心がけている。



2 ふるさとの「ひと・もの・こと」をどのような力を付けるために、どのような意図をもって活用したか。

（ふるさとへの愛着や誇り、貢献意欲の視点から）

- ・中学校区内の3つの地区それぞれを「ふるさと」と思えるように、特にその地域にいる“ひと”に出会わせる。

- ・この学習活動で生まれた「やってみたい」という想いを学校外で実現できる仕組み（公民館職員の理解や社会教育コーディネーターの伴走）をつくり、生徒の貢献意欲や実行力を培う。

（学力育成の視点から）

- ・対話を繰り返すことによるコミュニケーションスキルの向上や、自分の想いを言語化する活動の積み重ねによって伝える力を育む。
- ・現地に赴き、人に出会い、体験するといった本物の学習活動を通して、課題を発見する能力やその課題に主体的に取り組む態度を育む。

3 児童・生徒に見られた変容（どのような力が身に付いたか等）

（ふるさとへの愛着や誇り、貢献意欲の視点から）

- ・夏季休業中を中心に、地域のボランティア学習に主体的に参加する生徒が増えた。
- ・授業の中で提案した活動を放課後や週休日に実施する生徒が出てきた。

（学力育成の視点から）

- ・地域の大人との対話を通して、多くの生徒が自分の思いを伝える力が身についた。
- ・振り返りの中で、「新しい魅力や課題を見つけたり、今まで感じていたことを再確認したりできた」と回答した生徒が95%だった。
- ・振り返りの中で、「地域のことをよく知れた。地域の課題が自分で見つけられたので解決したいと強く思えた。」と答える生徒がいた。

4 課題や今後の展望

- ・持続可能な取り組みにしていくために、それぞれの負担感を減らしていく方法を模索する必要がある。
- 夏季休業中のボランティアの申し込みにICTを活用するなど
- ・中学生が地域に出てくることをもっと活用できる地域の醸成
- 公民館職員や地域自治組織の方の理解をさらに深めていきたい。